

vivo

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ]

8&9

AUGUST / SEPTEMBER
2004

CONTENTS

ミト・デラルコ第7回演奏会	1~2
日本のうた セミナー第4期	2
ファンファーレ・チョカリア 東欧吹奏楽団	3
村治佳織ギター・リサイタル	4
SELF PORTRAIT 五十嵐美香&北村さゆり	5
最近の公演から	6
ネッタマ&プロムナード・コンサートの小部屋	7
インフォメーション	8



写真上・左;ミト・デラルコ
上・右;村治佳織
左;ファンファーレ・チョカリア



ハイドンとモーツァルト、その創造的な対話を聴く。 9 / 25(土) ミト・デラルコ第7回演奏会

新メンバー、ソフィー・ジェントを迎えた昨年の第6回演奏会で好調なすべり出しを見せたミト・デラルコ。第7回演奏会もふたたび、ハイドンとモーツァルトという古典派の2人の大作曲家に挑みます。弦楽四重奏の歴史に不朽の足跡を残したこの2人の四重奏曲の数々は、そのすべてが至宝といってもさしつかえありません。ミト・デラルコはこれまで、ハイドンとモーツァルトの弦楽四重奏曲を、以下の通り演奏しています。ハイドン:弦楽四重奏曲 口長調 作品33の1 Hob.III-37、同二短調 作品76の2 Hob.III-76 5度(以上第1回)、同変口長調 作品50の1 Hob.III-44(第2回)、同二長調 作品71の2 Hob.III-70、同ト長調 作品76の1 Hob.III-75(以上第6回) 以上5曲。モーツァルト:弦楽四重奏曲第19番八長調 K.465 不協和音(第1回)、同第13番二短調 K.173、同第18番イ長調 K.464、同第22番 変口長調 K.589(第3回)、同第20番二長調 K.499 ホフマイスター(第6回) こちらも計5曲。いささか即物的に曲名が並びましたが、一度でもこれらの演奏会を聴かれた方なら、これらの曲がどんなに内容のぎっしりつまった、聴き応えのあるものだったか即座に思い出されるに違いありません。そしてこれは、広大な森の中の、ほんの数本の樹木にすぎないのです。モーツァルトはあと18曲残っていますし、ハイドンにいたっては(「作品1」から「作品3」までの、弦楽四重奏曲の前段階の作品および偽作を除いても)まだあと60曲! ミト・デラルコがこれから皆様にご紹介してゆく彼らの傑作は、まだまだたくさんあります。ぜひ、ご期待ください。

さて、第7回演奏会で取り上げられるのはハイドン:弦楽四重奏曲 二長調 作品20の4 Hob. - 34 ヴェネツィアの競艇(太陽四重奏曲集 第4番)、モーツァルト:弦楽四重奏曲 第14番 ト長調 K.387(ハイドン四重奏曲集 第1番)、ハイドン:弦楽四重奏曲 へ長調 作品77の2 Hob. - 82 雲がゆくまで待とう(ロブコヴィッツ四重奏曲集 第2番)の3曲。今回ミト・デラルコは、2人の作曲家が弦楽四重奏というジャンルを通じて相互に刺激があった、その「創造的対話」が聞こえてくるようなプログラムを組んでみました。3曲を通じてハイドンとモーツァルトの間に、どのようなキャッチボールがかわされたか。メンバー鈴木秀美による特別エッセイをどうぞお読みください。なお ヴェネツィアの競艇 や 雲が行くまで待とう といったタイトルの意味は何?というお問い合わせを受けるのですが、どちらも作曲家自身とは無関係な、後世の人がつけたタイトルです。前者は第3楽章のリズムからの連想、後者は第1楽章第1主題が同名のイギリス民謡に似ているところからつけられたもの。表題は「たくさんある曲を区別する目印」くらいに考えて、音楽そのものをお楽しみください。おっと脱線しましたね、それではエッセイをどうぞ! 《矢澤》

ミト・デラルコ今回のプログラムは、40歳のハイドンと晩年のハイドン、その間にモーツァルトが配置されている。モーツァルトが敬愛の念を抱いていたハイドンの二つの時期の作品、そしてそのハ

イドンにモーツァルトが捧げた作品を聴いてみようというわけである。

1761年からエスター・ハーヰィ(エステルハーヰ)家の副楽長として働き始めたハイドンは、60年代後半に入りますますます忙しくなり始めていた。うまく行っていなかった前任者、グレゴール・ヨーゼフ・ヴェルナーは66年に亡くなり、ハイドンは晴れて楽長となった。ハイドンをエスター・ハーヰィ家に雇い入れたパウエル・アントン・エスター・ハーヰィはハイドンが就任した翌年に亡くなっていたが、跡を継いだニコラウスはさらにスケールが大きく派手好みで、「豪奢王」と異名を取るほどであった。1766年以降、ハイドンと数名の音楽家たちは夏の間、ニコラウスが巨費を投じて作り上げた宮殿「エスター・ハーザ」に移り住むことになる。ヴェルサイユを模して作ったというこの一大パレスはニコラウスのお気に入りとなり、「夏」は次第に延びてついには10ヶ月に及ぶようになった。長く家族と離ればなれの生活を強いられた楽員たちの想いを侯爵に伝えるため、ハイドンが一計を案じて作曲した交響曲第45番 告別のエピソードはあまりにも有名である。

この曲が作曲されたのは1772年で、今回取り上げる 作品20の4 と同年である。だとすれば、たとえ部分的にでも 作品20 がアイゼンシュタット(エスター・ハーヰィ家の居城)ではなくエスター・ハーザで書かれた可能性もあり得るのかもしれない。ハイドンはこの時期、作品9(c. 1769-70)、作品17(1771)、作品20(1772)と、それぞれ6曲のセットを3つ立て続けに作曲している。



写真左;ミト・デラルコ
右; 日本のうた セミナーより

しかし、弦楽四重奏というジャンルの発展についてハイドンは何かを考えていたのだろうか、この後約10年のブランクを置いており、久々の1781年に作曲された 作品33 について、「まったく新しい種類の」と述べている。

60年代終わり頃から70年代初期のハイドンの音楽、とりわけ「告別」のように激しい感情的表現の曲の数々は、しばしば「疾風怒濤(Sturm und Drang)」時代の音楽と呼ばれる。しかし最近の研究では、ハイドンの音楽と「疾風怒濤」には関係がないとするのが有力である。「疾風怒濤」はマキシミアン・クリンガーが1776年に書いた同名の戯曲から取られた文学的な流れであって、それ以前の、しかも音楽と関連づけるのには無理がある。明るく屈託のない 作品20の4 のような「疾風怒濤」的でない曲も、同じ時期に多く書かれているのである。

さて、ハイドンとモーツァルトの親しい友人関係は幾つかのエピソードによっても伝えられている。80年代初頭にモーツァルトは一度ならず自宅にハイドンを招き、共にクアルテットを演奏したという。

そのときのヴァイオリンはハイドンとディッターズドルフ、ヴィオラはモーツァルト自身、そしてチェロはヴァンハルであった。モーツァルトは、85年にアルタリア社から出版されたいわゆる ハイドン・セットの初版譜に付された献呈の辞で「我が親愛の友なるハイドンへ」と呼びかけている。ハイドンはモーツァルト家で ハイドン・セット を聴いたのち、父レーオポルトに向かって「あなたの息子さんは、私の知る最も優れた音楽家です」と言った。今回演奏する 第1番 は実に爽やかかつ緻密に作曲されているが、前半二つの楽章に頻出するフォルテとピアノの交代はやや奇妙に思われるほどで、モーツァルトが何を意味したかったのかと考えさせられる。叙情的な旋律と第1ヴァイオリンの装飾的音型が印象的な緩徐楽章の後、最終楽章のフーガは6年後の大作 ジュピター 交響曲を思わずにはいられない。

1790年の暮れ、ハイドンのロンドン行きにあたって、モーツァルトは老巨匠の身を大変案じたと言われているが、訃報を聞かなければならなかったのはハイドンの方であった。センセーショナルな

成功を収めたハイドンは、エスター・ハーズィでの20年間を上回る収入を得たのである。ロンドンから戻ったハイドンは専らミサやオラトリオなど宗教曲の作曲に専念していたが、唯一書き続けた器楽作品が弦楽四重奏曲である。97年には 作品76、そして99年には 作品77 が作曲された。70年の 作品9 以来、弦楽四重奏は常に6曲のセットで作曲されてきたが、1799年の 作品77 は2曲のみ、そしてその後 作品103 は未完に終わっている。

晩年、社会的な成功とは裏腹に孤独でメランコリーに沈み、精神力や記憶力の低下に悩んでいたハイドンは、非常な労苦をもって作曲をしていた。今回演奏する 作品77の2 には全体に不思議な静かさがあり、突然ぼっかりと明るい緩徐楽章の旋律はいつまでも耳に残る。長い時間をかけて生成されるそのような味わいをミト・デラルコが表現できるかどうかについては甚だ心許ないが、老大家の話に耳を傾けるように、私たちもここから何かを学びたいと願っている。(鈴木秀美)

柴田南雄、清水脩、高田三郎の名作歌曲に迫る。 9/12(日)畑中良輔の 日本のおうた セミナー 第4期「戦後の歌曲」

第1期から4年をかけて、講師・畑中良輔氏の名解説により日本歌曲の魅力を紐解いてきた 日本のおうた セミナーも、今期第4期の3回で締めくくりとなります。

初回となる9月12日のセミナーでは、柴田南雄の歌曲集 優しき歌(抜粋)、清水脩の歌曲集 抒情小曲集(抜粋) 高田三郎の歌曲集 ひとりの対話 が研究曲として取り上げられます。

柴田南雄(1916~96)は「歌曲作家と呼ぶにはためらいがある」と畑中良輔氏も語るとおり、その創作全体に占める歌曲の割合はあまり多くありません。戦後すぐに畑中氏たちとともに作曲グループ「新声会」を結成、ロマン主義的な室内楽曲や歌曲を作曲したかと思えば、48年からは吉田秀和、齋藤秀雄たちとともに「子供のための音楽教室」を始め、教育者としても活躍。50年代には12音技法、ミュージック・セリエル(音列主義)に傾倒し、60年代にはジョン・ケージの不確定性に影響され、70年ごろからは日本民謡の採取に出かけ、自らのルーツを日本に求める というように、柴田南雄は驚くほど多彩なフィールドで活躍し、成

果を残した現代作曲界の巨人だったのです。そんな柴田南雄の作品の中でも、1944年から49年の間に、立原道造の詩により書かれた 優しき歌 は、歌曲を愛する人にとっては忘れ得ない作品となっています。初々しい抒情の光る歌曲集で、どこか近寄りたいたいイメージのあるこの作曲家の第一歩を知る上で最適な作品と言えます。

清水脩(1911~86)の歌曲といってまず思い出されるのは、高村光太郎の詩による 智恵子抄 でしょう。この息苦しいまでに突き詰められた歌曲集を書いた清水脩の作風について、畑中良輔氏はこう語っています。「清水脩ほど自己にきびしい作曲家を、私はほかに知らない。それと同時に、作品というものが、常に自己との戦いの帰結であるということを感じ知らされるのは、清水脩の作品においてである。」このような禁欲的な作曲家が、抒情や官能を綴ったらどうなるのか その答えが、室生犀星の詩による12曲の 抒情小曲集(1946年作曲)に聴き取れます。みずみずしく心地よい音のつながりの奥に、薄っぺらな感情や上辺だけの甘美さを排除して人間の心の本質を突

こうとする作曲家の鋭い眼が光っているのです。

高田三郎(1913~2000)もまた、内なる声に静かに耳を傾けるタイプの作曲家でした。無調や12音技法に対してはしっかりと否定の態度をとり、日本語のテキストをもとにした古典的で質素な手法による声楽作品を数多く残しました。高田三郎の代表作ともいえる合唱曲 水のいのち と同じ高野喜久雄の詩による歌曲集 ひとりの対話(1965~71年作曲)について、畑中良輔氏は次のように述べています。「ひとりの対話 は、究極の高田歌曲ともいえる奥行きをたたえ、聴く者を果てしない感動へと導くであろう。生きて行くための自己との対話の中に、静かで烈しい高田音楽が脈打っている。」

当日は、今や当セミナーではおなじみとなった日本歌曲のスペシャリスト関定子(ソプラノ)がゲスト出演。高田三郎の ひとりの対話 全6曲ほかを披露する予定ですので、おたのしみにも。

《関根》



ファンファーレ・チオカリーアのアルバム

『ラジオ・バシユカニ』*1998年。彼らの原点というべき、タフでワイルドなサウンド。

『パロ・ピアオ』*1999年。一気に洗練度アップ。アスファルト・タンゴ カサブランカ など名曲満載。

『イアグ・バリ』*2001年。上述映画のサントラ。タイトル曲は泣けます。

以上全タイトル、芸術館ミュージアムショップ「コントルポアン」にてヘヴィ・ローテーション中!

ジプシー・プラス熱狂度 150%。情熱と哀愁のおやじパワー 200%。 8 / 27(金)ファンファーレ・チオカリーア 東欧吹奏楽団

皆様、お手元の「ファンファーレ・チオカリーア 東欧吹奏楽団」のチラシをごらんください。特に、あまりの極彩色、表面を覆いつくす極大四文字熟語の羅列に「なんじゃいこりゃあ!」と思わず裏返してそのまま見なかったことにしてしまった方、もう一度ごらんいただけると嬉しいのです。「一目仰天」一聴驚嘆からはじまる四文字熟語の数々は、このルーマニア生まれのジプシー・プラス・バンドに出会い、聴いてしまった人(筆者含む)の心と身体に巻き起こる状態を忠実に記したものであります。どこが「酒池肉林」で「魑魅魍魎」なんだ、と問われると返答に窮しますが、とにかく理屈めきでそなのです。「ほんとう?」と思われる方のために、各界の著名人から寄せられたコメントを紹介しながら、「ファンファーレ・チオカリーア」の魅力に迫ることにしましょう。

「もしルーマニアでオリンピックが開催されることになったら、新競技にプラスバンドが登場するかもしれない。そう思わせるほど、彼らの音楽の疾走感には並はずれたものだ」(ピーター・バラカン氏:朝日新聞2000年8月30日夕刊)

名ブロードキャスター・バラカン氏、盛り上がっています。一分間に200のピートをたたき出すという彼らの演奏の「速さ」はたしかにただごとではありません。実は先日「FMばるん」の番組でこのグループについて話したのですが、DJの方が「スカ・パンクみたいですね!」とおっしゃっていました。けだし至言。「ファンファーレ・チオカリーア」とは「ひばりのファンファーレ」の意味ですが、まさにひばりの群れのさえずりのごときエネルギーと活気です。

それにしてもなぜプラス? 昨年芸術館に登場し爆演を繰り広げた同じルーマニアのジプシー(ロマ)・バンド「タラフ・ドゥ・ハイドゥークス」は弦楽中心でしたよね?理由は、彼らの生業にあります。牧畜中心だったクレジャニ村の住民であるタラフ一行に対し、チオカリーアの面々が住むゼ・ブラジーニ村では農業が中心。農作業のため節くれだった指では弦楽器は扱えず、おのずと管楽器を選ぶことになったわけです(音楽的には、かつてバルカン半島を制圧したトルコの軍楽隊の影響もあると言われています)。厳しい環境の中で鍛

えられた身体が、その生命力の奔流のようなサウンドの源となっているのです。ちなみにこのゼ・ブラジーニ村、約400人の住民のうち成人男性は100人ほどですが、その8割が音楽家というすごい村です。

「尋常ならざるエネルギーにみち、しかもききての胸をぐりぐりえぐりとる強烈な情感をもそなえた音楽」(黒田恭一氏:サライ1999年7月1日号)

昨年芸術館でのコソソットの演奏会パンフレットにすてきなエッセイを書いてくださった黒田恭一さんは、「強烈な情感」を彼らの音楽から読み取られています。「爆裂」「疾走」といった単語が飛び交う彼らの演奏ですが、その背後には濃縮された喜怒哀楽の感情がいつも沸騰しています。祝祭的な音楽が、彼らの生の陰画(陽画というべきでしょうか)であることを忘れるわけにはいきません。鉄道はあるけど駅はないので住民は列車がカーブで速度が落ちたときに飛び降りるとか、村の公衆電話は一台だけとか、面白いエピソード満載なのですが、それは反面彼らの生活の厳しさの証明でもあります(このあたり、6月12日に芸術館でも上映した彼らのドキュメンタリー映画『炎のジプシー・プラス』でお確かめください。吉祥寺のハウスシアターや渋谷のユーロスペースなどで上映中)。「ファンファーレ・チオカリーア」自体、大部分のジプシー・バンドがそうであるように本来冠婚葬祭のための楽士たちであり、雇い主の要求には常に従わなくてはなりません(20時間ぶっ通しで演奏したという伝説もあるそうです)。ロマに対する差別と偏見の目も、いまだ根強く存在するでしょう。

しかし、そうした厳しさ、つらさを「強烈な情感」に変え、音楽を豊かにふくらませていくのが彼らのすばらしさです。一見物質的には豊かな生活を送っている私たちの心はほんとうに「豊か」なのだろうか?と思わせる、力強くたくましい生の証、それがファンファーレ・チオカリーアの音楽なのです。

彼らの強靱でタフな音楽は、こんな感想も導き出します。2月にATMアンサンブルのヤナーチェク企画ですばらしいプレトークを聴かせてくださった伊東信宏さんの鋭い指摘です。

「その扇情的リズム、ふるいつきたくなるような節

回し、あくまで無反省な大音量などは、コンサートホールというプロテスタントの節制、節度を前提とした制度からは排除されてきたものはずだ。(中略)こういう音楽が、東京の真っ只中にまで出現してしまうのは資本主義がこんな異物でも平気でのみ込んでしまうほど懐を深くしたからだろうが、しかし彼らは、場さえ与えられればそんな微温的システムなど食い破りかねない勢いを感じさせる」(伊東信宏氏:朝日新聞2000年8月29日夕刊)

無名だった彼らは90年代中ごろひとりのドイツ人プロデューサーの尽力によってヨーロッパに紹介され、いまや年間200公演をこなす超人気バンドになりました。前述の『炎のジプシー・プラス』の中でもベルリンや東京における、観客が一体となって踊りまくる熱狂的な演奏風景が映っていました。それは、予定調和な盛り上がりなど微塵も感じさせない、心から彼らのリズム、彼らのメロディに突き動かされ踊る姿でした。伊東さんのおっしゃるとおり、「微温的システムを食い破る」という言葉を、信じたくくなります。そのことを別の角度から言った、俳優の山口智子さんのこんなコメントも、まったく同感!と思わずにはいられません。

「チオカリーアのリズムの連射は、立ってる地面の下から吸い上げる地球のパワー。生きるぞ、生きるぞと、彼らの魂が歓喜の声をあげている。このおやじ軍団が、世界の壁をぶち壊す日も近いだろう」(俳優:山口智子氏)

情熱と哀愁のおやじ軍団12名と、映画の中でも艶麗に踊りまくっていたアウレリア姉御が、いよいよ水戸芸術館にやってきます。赤銅色のトランペット、うねるクラリネット、飛翔するサクソフォーン、野太いピートを響かせるチューバ、ホルン、パーカッション。そしてあくまでもしょっぱいダミ声ヴォーカル。彼らの定番名曲も、聴いてあっと驚くポップス名曲も、すべてが渾然一体となって晩夏の水戸を燃え立たせます。踊ってももちろんOK(彼らはますますノってくれるでしょう)。じっくり聴くもまたよし。元気を注入しに、おいで下さい!

《矢澤》



村治佳織

「神につかえる巫女のような・・・」企画者・間宮芳生のエッセイ掲載！ 9/5(日)村治佳織 ギター・リサイタル

イギリスの名門レーベル・デッカから発売となった新譜CDのみならず、写真集、DVDの発売や、テレビ、CM等への出演でも話題となっているギタリスト・村治佳織が水戸芸術館に初登場します。並み居る若手ギタリストの中でも抜群の人気と存在感を誇る村治佳織の単独リサイタルとあって、チケットは早々に完売。ここ水戸でも注目と期待が高まっているのがうかがえます。

リサイタルまであとわずか、企画者・間宮芳生から寄せられたエッセイを読んで、楽しみにお待ちください。氏とギターのかかわりから、20世紀のギター音楽、若手演奏家の台頭、そして村治佳織の音楽性まで、実に魅力的に語られています。最近発表になった演奏予定曲目(チラシからは多少変わっています)とともにどうぞ! 《聞根》

村治佳織 音の巫女

1960年ごろから80年代にわたって、私はテレビドラマや、舞台劇、記録映画などのための音楽を作る仕事を数々やって来た。その中には、NHKテレビの大河ドラマ、若山富三郎が弁護士役の裁判劇シリーズ「事件」、民放テレビでは、若尾文子主演のメロドラマ、有吉佐和子原作の時代物など、他にもいろいろあった。その種のドラマのBG(バック・グラウンド)音楽、いわゆる劇片のためには、しばしばギターを含む小編成のアンサンブルを使ったものだ。毎週作曲してスタジオ録音をしなければならない連続テレビドラマの仕事がはじまると、長ければ半年間、毎週録音スタジオでギタリストに会い、作った曲を弾いてもらうということが度々あった。

考えて見れば、第二次大戦後から現在までの半世紀余、ギターほどに世界中で多くの人が親しんだ楽器はない、と言えるのではあるまいか。弾く人にとっても、聴く人にとっても。

エレキ・バンドなんていう言い方は、もう古色蒼然だが、そのエレキ・バンドのために作られたエレキ・ギターが一好例で、大衆音楽のさまざまな分野ごとに、ギターは見事に姿を変え、仕掛けを工夫し、表現力を変化させた。クラシック・ギター用と一見変らぬ形ながら、アンプを組み込んでスピーカーから音を出す電気ギターもあれば、スチール弦を張った、いわゆるフォーク・ギターもあり、

ジャズ、ロック、その他、ほとんどすべての民衆的な音楽、民衆的な歌謡とともに、ギターは用いられ、愛されて来た。

テレビドラマや映画の音楽のための必要に応じて、私もエレキ・ベース・ギターから、ガット弦を張ったクラシック・ギターまで、ほぼ何でも使った。

同じ時期に、武満徹も、映画音楽などのために、しばしばギターを愛用したようである。そうして、いわゆる実用音楽を離れての彼の作品表の中にも、とても実験的な作品から、12の歌のような、ビートルズ・ナンバーや、オーバー・ザ・レインボー、ロンドンデリーの歌など、新しい、そして古い愛唱歌の編曲に至るまで、ギターのための秀作がある。これも、ギターの世紀の反映なのだと言えるだろう。

他のどんな楽器とも比較にならないくらい、ギターは、多様にその姿、形、仕掛、音色を変え、さまざまな分野に適合し、表現を拡大、いや、拡散させて来ているが、平行して、いわゆるクラシック・ギターの分野は、スティックなまでに徹底した純化を貫いている。その現象は、ちょっとした不思議なのだが、近年、そのクラシック・ギターの分野に若い名手たちが続々登場し、多くのファンを得ている。山下和仁あたりがはじめて、今はもっとうずつと若い鈴木大介、木村大、そして村治佳織。

近・現代の楽器が、一般的にいえばみな大音量を求める中で、極端に小さな音量のクラシック・ギターの若い名手に人気が集まるのは何故か。考えて見ると、とても面白い。禁じられた遊び や アルハンブラの想い出 などが、ひきがねだったとしても、またギターといえばスペイン的な情緒が魅力だと言っても、それだけでは説明にならない。

ひとつ確かなことは、どんな楽器より、ギターに

は素手で音に触れている感覚がある。たとえ聴くだけでも。古楽器のリユートにも似た感覚があるだろうが、こちらは、どうしたって時代(時間)のフィルターがかかる。

さて、この辺から村治佳織についてだ。そういう素手の感覚は、時に生々しくも、攻撃的にも、また時には媚びともなるものだが、村治佳織のギターは、そのどれとも違って、実にピュアだ。並居る若手の人気ものたちの中で、彼女はとても特別なのだ。

神につかえる巫女の、少しなまめかしく、しかし厳粛なふるまいを見るように、その演奏は、一言でいえば、すばらしく純度高い。その純度は、実は彼女の並はずれた演奏技術の高さ、奥深さから来ている。しかし、村治佳織の演奏の、一種、聖なる儀式空間にいるような(といって重苦しいものではまるでなくて優しみのある)「空気」の理由は、技だけのものでない。そんな不思議の理由の説明を試みるのは今はやめて、彼女の演奏と、その「空気」をたのしもう。

さて、私の作品表には、ギターのための作品はたった1曲あるだけで、それが 三つの聖詞 (1979年)である。英語のタイトルは"Sacred Spells"。スペルズは「呪文」である。ギターをひいて神につかえる巫女のように、純度高い響きの空間をつくる村治佳織にうってつけの曲だと私は思っている。こんどはその三つの楽章のうちの第二章をひく。四度の重音のならぶ静かな音の林の中から、秘密めく祈禱のことばのようなパッセージが浮び上って来るはずだ。

間宮芳生

(作曲家・水戸芸術館音楽部門企画運営委員)

村治佳織 ギター・リサイタル 日時:2004年9月5日(日)13:30開場・14:00開演
会場:水戸芸術館コンサートホールATM チケットは完売しました。

【演奏予定曲目】

デュアーテ:イギリス民謡組曲

武満 徹(編曲):ギターのための12の歌より オーバー・ザ・レインボー

武満 徹(編曲):ラスト・ワルツ

タレガ(編曲):ヴェニスの謝肉祭による変奏曲

間宮芳生:三つの聖詞より 第2章

テオドラキス:エピタフィオスより 不死の水/わが星は消えて/5月の日/きみは窓辺にたたずんでいた
武満 徹(編曲):ギターのための12の歌より

ミッシェル/イエスタディ/ヒア・ゼア・アンド・エヴリウェア/ヘイ・ジュード/ロンドンデリーの歌
ディアンズ:サウダージ 第3番



写真左;五十嵐美香
右;北村さゆり

SELF

PORTRAIT

水戸出身の新進パーカッショニスト・五十嵐美香が大自然のリズムを刻みます。

9 / 11(土) 五十嵐美香 マリンバ&パーカッション ・リサイタル

マリンバという鍵盤打楽器の魅力に惹かれた動機は、国際的マリンバ演奏家として有名な安倍圭子先生と共演できた喜びと感動に満ちた出会いがあったからです。それは私が16歳の時。トヨタコミュニティコンサート(1988年)開催の折に、ゲストとして安倍圭子先生と作曲家の三枝成章氏をお迎えしていた。当時茨城交響楽団団員の一人として、県民文化センターの大ホールと同じステージの片隅で打楽器を担当し演奏したのです。

今回、リサイタルのサブタイトルを“生命と心の旅”と名づけた理由は、私が最も尊敬する師匠、安倍先生(現在、桐朋学園大学教授、名古屋音楽大学大学院客員教授)が作曲なされた作品を地域社会の多くの人々にご紹介し、ご鑑賞いただきたかったからです。

演奏会で取り上げる安倍作品は、わらべ歌による譚章 山をわたる風の詩 森の会話。の3曲。これらの作品には作曲者自身が自然美を崇拜し、そこから生まれる豊かな恵みと実りに感謝している気持ちが表示されていて、聴く人の心に深く浸透していきます。

北爪道夫作曲の サイド・バイ・サイド では、ボンゴ、コンガ、ドラムなどによる迫力ある演奏が、大地の声と轟きを伝えてきます。

三木稔作曲の マリンバ・スピリチュアル は、マリンバと皮質・木質・金 属質の打楽器群が織り成す静から動への世界が聴衆者を魅了します。

今回の演奏会では、マリンバの特性と各種打楽器の特色を、目で楽しみ、耳で魅力的な音色を聴き、心で表現豊かな曲想を感じていただきたいと思います。そして、マリンバのサウンドはいうまでもなく、日本打楽器、ラテン民族打楽器が織り成す様々な音色とリズムの変化・面白さ・躍動感溢れるパーカッションの音世界を堪能してください。ソロ作品ばかりではなくパーカッションのアンサンブル作品を阿部剛さん、黒岩恵美さん、窪田翔さんとの共演でお届けします。

このリサイタルをとおして、マリンバとパーカッションの幅広い活動分野並びに効果的な活用のしかた、価値観をご理解していただけることを心から願っております。

五十嵐 美香

牛久市在住のピアニスト 北村さゆりがドイツ、フランスの風を運びます。

9 / 18[土] 北村さゆり ピアノ・リサイタル

茨城のある高校生が音楽の道を志してから、はや二ケタの年月が流れました。東京へ、そしてドイツ、フランスへと何かに導かれるように道は続き、茨城に戻ってまいりました。決して平坦な道のりではありませんでしたが、今思えばこの歳月は、いわば音楽という泉から少しでも多くの水を汲むべく、ピアノ弾きとしての、そしてまずひとりの人間としての器を、わずかでも大きくする為に必要な時期であったように思います。このたび9月18日に、すてきなホールで演奏させていただくことになり、水戸の皆様及び、水戸芸術館のサポーターの方々にお会いできるのを大変楽しみにしております。

本公演にあたり、ピアノ音楽を色々な角度から皆様にお楽しみいただければと考えながら、プログラムを組んでみました。選んだ3曲には、個人的にそれぞれ大切な思い出がありますが、そのような感情を抜きにしても、どれも弾く・聴くに値する佳品だと思います。

最後になりましたが、今までピアノを弾き続けることができましたのも、様々な有形無形の出会いがあったことでした。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

北村 さゆり

【プロフィール】

5歳よりピアノを始める。太田道子、青山三郎、高澤ひろみに師事。土浦一高、東京学芸大学教育学部音楽科を卒業後に渡独、シュトゥットガルト音楽大学大学院及びソリストコース卒業、アンドレ・マルシャンに師事。その後マンハイムに移り、器楽伴奏を学ぶかたわら、フランス・トゥールーズで、テレーズ・デュソーの薫陶を受ける。A.ヤジンスキ、H.ライグラフ、G.セボック他に師事。2002年秋に帰国。今回の水戸芸術館でのリサイタルは、04年7月東京におけるリサイタルに引き続き、事実上、帰国デビューの一環である。

最近の公演から

MAY



1



2



3



4



5



6



7



8

音楽物語 ぞうのババール(5月5日)
「こどもの日に、こどものために」9年前誕生した水戸芸術館のオリジナル企画、『音楽物語 ぞうのババール』。芸術館では7年ぶりの復活です。第1回公演を10歳くらいで観に来たお子さんは、もう成人を迎える頃ですね。そのくらいの年月がたったけれども、ブランクの音楽とババールのお話は、ちゃんと変わらずここにあります。ピアノの高橋アキさん いつもどおりサティも弾いてくださいました も、朗読の長野羊奈子さんも、ブランクなどなかったようにたちまちババールの世界の住人に戻りました(長野さんの朗読が、千変万化の声色で魅了した以前に比べ、ずっと穏やかな、優しい語り口になったのは印象的でしたが)。変わったことは、まずスライドがデジタル化され、ぐっつと鮮明な画質になったこと。そして「もうひとりの演奏家」というべきスライド操作役が、オリジナル企画者の室住素子さんからスタッフの馬場千恵にバトンタッチされたこと。こうして、ババールは21世紀へと受け継がれていきます。出演者もびびりするほどお行儀よく聴いて、観てくれたお子さんたちに、芸術館15年の歩みが投影されていたような気がして、嬉しい一日でした。《矢澤》

アンケートから ピアノとろうどくすぐり上手でした(ひたちなか市:あき大くん9歳) おんがくがたのしかつた。おかあさんがしんでかわいそうだった(ひたちなか市:えりかちゃん6歳) エレベーターを10回行ったところがおもしろかった。だいいいがないピアノ(註:サティの無題曲)のだいいいは「たのしいワルツ」にしました(水戸市:きょうかちゃん8歳) だいいいがないサティのきよくは「ちょうちんのおいかけて」(水戸市:たけおくん5歳) おきなわのおばあちゃんにも見せてあげたいです(ちえちゃん9歳) おばあさんとババールがたいそうしているところがおもしろかったです(友部町:ともみちゃん9歳) さい後ババールがぞうの森の王さまになったことがよかったです(内原町:かずねちゃん8歳) 子供たちが大変よろこんでいました。私も楽しませていただきました。また続けてください(玉造町:N.O.さん)

ナタリー・シュトゥッツマン
コントラルト・リサイタル(5月22日)
女声、しかもコントラルトによる 冬の旅 ということで、その声と表現に大きな注目が集まったリサイタル。その印象は、下記のアンケートにも読まれるように、聴き手により様々だったようだ。今回の来日に合わせて発売となった同じ演目のCDの批評でも、「生産しない女の極限を体現している」(片山杜秀氏)とし、女性的な表現から

決別しているとするものから、「まるやかで馥郁たる声」(水谷彰良氏)とし、肉感的で濃厚な女性性を感じさせると評するものまで、非常に幅広かった。いずれにせよ、今日、過剰なまでに先鋭的に表現されることの多い 冬の旅 に、シュトゥッツマンが極めて正統的かつ音楽的なアプローチを聴かせ、シューベルトの音楽の良さをあらためて感じさせてくれたことは、もっと評価されて良いと感じる。《関根》
アンケートから アルトではなくコントラルトという意味が分かりました。女声という感じがしなく、もちろん男声ではない。性を超えていました。それが音楽に純粹さを加えていて、すてきでした。ピアニストもすばらしかったです。(ひたちなか市:M.K.さん) 男性の歌う 冬の旅 の最終目標は「死」または「絶望」ですが、ナタリー女史の歌う“女の冬の旅”は、かすかに「希望」が感じられるものでした。子供を諭す母のような感じもありました。(水戸市:S.E.さん) とてもすばらしい演奏でした。低音の豊かな響き、高い音の澄んだのびやかな歌声。全身からあふれる表現のすばらしさ。集中力。1つの物語を語っているようで、こちらを引き込まれてしまいました。(水戸市:K.K.さん)

「茨城の名手・名歌手たち 第15回」 出演者オーディション(5月29日)

若き音楽家たちの登竜門として、年を重ねるごとに注目度がアップしている「茨城の名手・名歌手たち」。第15回を迎える今秋の演奏会に先立ち、5月29日には出演者オーディションが行われました。今回の対象は「鍵盤楽器・弦楽器・邦楽器・邦楽アンサンブル」で、合計52件の申し込みがありました。厳正な審査の末、選ばれた以下の7名が10月23日の演奏会に出演します。茨城が生んだ「名手・名歌手たち」をどうぞ暖かく見守ってください。《関根》

「茨城の名手・名歌手たち 第15回」演奏会

2004年10月23日(土)17:00開演

司会:畑中良輔

出演(敬称略・受験番号順):

沢田尚美、坂紀乃、佐藤美乃里、井上修(以上、ピアノ)、三巻明子(パイプオルガン)、川又明日香(ヴァイオリン)、木下通子(チェロ)

応募総数 52

(鍵盤楽器 35 / 弦楽器 14 / 邦楽器 2 / 邦楽アンサンブル 1)

審査委員(敬称略・五十音順)

臼井英男、久保陽子、田村拓男、畑中良輔(審査委員長)、弘中孝、間宮芳生、三善清達、若杉弘



* nettama=ネットワークする猫、タマ。美術館のコンサートをサカナにいるんなところへnettamaします。

映画『アンダーグラウンド』をめくって

「『アンダーグラウンド』もやりたかったんですよ...。」ある日、担当Yがやってきてつぶやいた。なんのこっちゃい、と思ったら、6月12日に「ファンファーレ・チョコリア」の関連企画としてNPO法人シネマパンチとの共催によりACM劇場で行なった映画上映のことらしい。あの時、ファンファーレ・チョコリアのドキュメンタリー映画『炎のジブシー・プラス～地図にない村から』が上映されたのだがYとしてはエミール・クストリツァ監督1995年の傑作『アンダーグラウンド』も上映し2本立てにしたかったそうなのだ。そんなにいい映画なのかY?「そりゃそうですね。冒頭からお尻に花刺してますし、プラス爆発でしょう? 地下世界は『未来世紀ブラジル』もビックリのローテク・ユートピアであの花嫁の飛ぶシーンね。チンパンジーお前何歳だよ! って感じだし、あの大地が割れてみんなパーティーしながら...たまらないですよ(泣いている)...興奮して何を言っているのかさっぱりわからない。どうも、ジブシー・プラス・バンド(チョコリアではない)が映画に出演し、始終活躍しているのでこの映画を上映したかったらしいのだ。ただ日本での配給権が切れ、フィルムが借りられなかったらしい。

あんまりYが残念がるのでしょうがなくDVDを観た。そうして驚愕した。これはすごい映画だ。物語の始まりは第2次大戦下の旧ユーゴ。侵略者ナチス・ドイツに抵抗するパルチザンに参加した策略家のマルコは友人のクロを誘い大奮戦。やがて戦争は終結しチトー政権が誕生するものの、マルコは地下にかくまった避難民とクロを「まだ独軍の占領下だ」とだまし、武器を製

造させ外貨稼ぎをする。さらに地上では政府の重要人物となりクロの妻を奪い取ってわがもの顔。だが幻想の地下帝国にも終焉の時が来た。そして人々が地上に出たとき、そこは悲惨なユーゴ内戦の真っ最中...。ラスト・シーンは圧倒的だ。

淀川長治さんも「毒の花が香る人間残酷悲劇」と褒めちぎっているこの映画は1995年のカンヌ映画祭でパルム・ドール(グラン・プリ)を受賞している。同映画祭で惜しくも準グラン・プリにとどまったテオ・アングロプロス監督の『ユリシーズの瞳』もパルカン問題を扱っていたし、この頃パルカン半島が表現者たちにとって熱いテーマだったことがうかがえる。クストリツァのこの映画、いささか強引で飛躍の多い展開ながら、すさまじいエネルギーと混沌、猥雑、ブラックユーモア、狂気のテンションで2時間51分を押し切り観ていくとくたになるがそれだけの価値はある映画だとお勧めしておきたい。ジブシー・プラスが全編にわたって鳴り響くので、チョコリアを聴かれる方はこの機会にご覧いただくと、音楽と共にその背景となる(彼らはルーマニアだけけど)パルカン半島の血塗られた激動の歴史が体感できるに違いない。

ところでこの映画は公開当時とてか大きな賛否両論を呼んだそうなのだが、それは当時「西側」のマスコミにとって「悪役」とされていた「独裁者」ミロシェビッチ側を擁護するような内容だったからということだ。このあたり僕には判断のつきかねる問題だが、間違いのないことは、僕たち日本人にとって、それは悲しいほど遠い世界の議論だった。この映画にこめられた政治的なメタファーやアイロニーの数々を、2004

年の観客である僕らはどれほど理解できるだろうか? それ以上に、ユーゴ内戦のことをどの程度記憶し、いまだ平和にはほど遠いかの国の状態を、どの程度認識しているだろうか?

しかしたとえアクチュアリティをとらえ損なっても、せめて普遍的な問題を心に刻もう。この映画の中心的な命題のひとつは「情報操作によって人々はいかに簡単に(50年もの間!)だまされるか」である。情報は常に複数のものを知り慎重に吟味せねばならない。発信する側にだます意図など毛頭なくても、ものごとに白黒つけいっせいに雪崩れる前に、僕は立ち止まって考えてみる必要がある。イラクは、ブッシュ側から見れば平定せねばならない危険なテロリストの地かもしれないし、かの地の住民(全部ではないにせよ)にすればアメリカこそ侵略者かもしれない。人質になって解放された日本人は、かの地に赴いたことをとがめられるべきなのかそれとも「自己責任」という言葉の用い方に問題があるのか。プロ野球1リーグ制への流れは是か否か。朝青龍は悪玉横綱なのか(僕は応援するぞ。昨場所の琴の若戦、あれは死に体ではない)。行列のできるラーメン屋はほんとうにうまいのか。複数の異なる見方を斟酌しながら考えることが、今こそ必要なはずだ。そう、僕は戦争という究極の「白黒つける」手段を放棄し、勇気あるグレイ・ゾーンを選択した国の申し子なのだから。



これはファンファーレ・チョコリア

プロムナード・コンサートの小部屋

【プロムナード・コンサート1000回記念】

皆様に長らく楽しまれてきたパイプオルガン・プロムナード・コンサートも、とうとう1000回を突破しました。毎回欠かさずおいでくださる方、通りがかりにふと耳にした方、出会いの形はさまざまでも、皆様等しく1000回の歩みを支えてくださったお客様です。あらためて、お礼申し上げます。

さて、感謝の気持ちを込めてお届けする8月28日(土)の1000回記念特別演奏会は、鈴木隆太さんの登場です。昨年の「現代音楽を楽しもう」でサクソフォーンの清水靖見さんと妙妙なインタープレイを披露してくれた鈴木さん。少し前には、同じシリーズで和太鼓の林英哲さんと怒涛の共演を果たし、また水戸室内管弦楽団の演奏会にも鍵盤楽器奏者として登場しているので、ご記憶の方も多いでしょう。鈴木さんに、今回は夏休みにふさわしい以下のようなプログラムを組んでいただきました(即興演奏もあります!)。いつものオルガン・ファンのみならず、「これからのオルガン・ファン」であるお子さんたちにもぜひ来ていただきたい、そんな思いが込められています。夏休みの最後に、ご家族みなさんと、ぜひどうぞ!

[曲目]

G.F.ヘンデル:ラルゴ

- E.モリコーネ:『海の上のピアニスト』より メイン・テーマ
- 宮川 泰:『さらば宇宙戦艦ヤマト 愛の戦士たち』より 白色彗星
- L.ヴェルヌ:24の自由な形式の小品 作品31 より 子守歌
- C.コリア:『チルドレンズ・ソングス』より 夏休みの終わりに寄せる即興演奏
- J.ウィリアムス:『ジュラシックパーク』より メイン・テーマ

【オルガン名曲ライブラリー ご報告】

去る7月25日に「オルガン名曲ライブラリー」 パッサリ以前の作曲家たち(北ドイツ・オランダ編(2))が行われました。入念なプログラミングを見事な演奏で現のものとしてくれた椎名雄一郎さんの名演に拍手喝采。曲目は以下の通りです。

[曲目]

- H.ハインリヒ・シャイデマン:プレルーディウム 二短調
- J.P.スヴェーリンク:ファンタジア・クロマティカ
- S.シャイト:ベルガマスカ
- F.トゥンダー:コラル幻想曲「来たれ、聖霊、主なる神」
- G.ベーム:コラル・パルティータ「ああいかにかなき、ああいかに虚しき」
- D.ブクステフーデ:トッカータ ヘ長調

information

チケットに関するお問い合わせ

...水戸芸術館チケット予約センター / 029-231-8000
営業時間 / 9:30 ~ 18:00(月曜休館)

公演内容や企画に関するお問い合わせ

...水戸芸術館音楽部門 / 029-227-8118

【ATM便り】毎月1回茨城新聞に不定期登場。

NHK-FM水戸【FM水戸アップデート】火曜日18:15頃~15分ほど(不定期登場) 水戸周辺83.2MHz、日立周辺84.2MHz。

チケット・インフォメーション 8月28日(土)発売分

ロジェ・ムラロ ピアノ・リサイタル 10/16(土)18:30開演
料金(全席指定):A席¥3,500 B席¥2,500
茨城の名手・名歌手たち 第15回 10/23(土)17:00開演
料金(全席自由):¥1,500

8月29日(日)発売分

水戸室内管弦楽団第59回定期演奏会
11/6(土)18:30開演、11/7(日)14:00開演
料金(全席指定):S席¥5,000 A席¥4,000 B席¥3,000
水戸室内管弦楽団第60回定期演奏会
12/3(金)18:30開演、12/4(土)18:30開演、
12/5(日)14:00開演
料金(全席指定):S席¥13,000 A席¥11,000 B席¥8,000
第59回と第60回のセット券(限定300セット):S席¥16,000 A席¥13,500

発売初日に芸術館でお求めになれるチケットは、水戸室内管弦楽団第60回定期演奏会ではお1人様1回につき2枚までとさせていただきます。
水戸室内管弦楽団定期演奏会には、友の会の先行予約があります。

これからの演奏会・残席情報

○...残席あり(20席以上) ...残席わずか(20席未満) x...残席なし 中央...中央ブロック 左右...裏...左右ブロックおよびステージ裏 補助...補助席

ファンファーレ・チョコリニア 東欧吹奏楽団
8/27(金) ...中央x、左右
村治佳織 ギター・リサイタル 9/5(日) ...完売
五十嵐美香 マリンバ&パーカッション・リサイタル
9/11(土) ...自由席
畑中良輔の 日本のうた セミナー 第4期
9/12(日) ...自由席 11/21(日) ...自由席
1/16(日) ...自由席
北村さゆり ピアノ・リサイタル 9/18(土) ...自由席
ミト・デラルコ第7回演奏会 9/25(土) ...中央x、左右・裏
中村真由美・佳代 デュオ 10/9(土) ...自由席
オペラの花束をあなたへ - 16 イタリア・オペラの宝石箱
10/10(日) ...中央、左右

8/5(木)現在の状況です。

公演当日に残券がある場合、開演1時間前より水戸芸術館チケットカウンターでお得な学生券を発売いたします。ご購入の際には学生証(記名章)をお持ちください。公開セミナーなど、学生券のない公演もございますので、予めお問い合わせ下さい。

固定席が売り切れ次第、補助席を販売いたします。

水戸芸術館の主な8・9月のスケジュール

コンサートホールATM

水戸市芸術祭 少年少女合唱祭 8/1(日)14:00開演 入場無料
「カフェ・イン・水戸 2004」関連企画コンサート「ともものおとのもと」
8/15(日)15:00開演 料金(全席自由):小人(3歳以上)¥500 大人(中学生以上)¥1,000
水戸市芸術祭 ジュニアオーケストラ演奏会
8/22(日)14:00開演 料金(全席自由):¥500
ファンファーレ・チョコリニア 東欧吹奏楽団
8/27(金)19:00開演 料金(全席指定):A席¥4,000 B席¥3,000
村治佳織 ギター・リサイタル
9/5(日)14:00開演 料金(全席指定):A席¥4,000 B席¥3,000

五十嵐美香 マリンバ&パーカッション・リサイタル
9/11(土)18:00開演 料金(全席自由):¥2,500
畑中良輔の 日本のうた セミナー - 第4期 戦後の歌曲 第1回
9/12(日)14:00開始 料金(全席自由):1回券¥1,500 第4期通し券¥3,600
北村さゆり ピアノ・リサイタル
9/18(土)15:00開演 料金(全席自由):¥2,500
ミト・デラルコ第7回演奏会
9/25(土)18:30開演 料金(全席指定):A席¥3,000 B席¥2,000

エントランスホール

パイプオルガン プロムナード・コンサート
8/7(土)13:30/15:00 8/14(土)13:30/15:00 8/15(日)12:00/13:30
9/4(土)13:30/15:00 9/23(木・祝)12:00/13:30 9/26(日)12:00/13:30
プロムナード・コンサート 1000回記念特別演奏会
8/28(土)13:30 出演:鈴木隆大
入場無料 演奏は各回20分程度です。

ACM劇場

水戸市芸術祭 市民演劇祭
茨城大学演劇研究会 8/20(金)19:00開演
劇団ブラ net 8/21(土)19:00開演
舞踊劇団「創(生まれる)」 8/22(日)16:00開演
劇団撫で肩ミサイル 8/27(金)19:00開演
演劇集団スリーサイズ 8/28(土)19:00開演
劇団OH-NENS 8/29(日)16:00開演
料金等詳細につきましてはお問い合わせ下さい。TEL/029(225)3555
第8回水戸短編映像祭
招待上映部門(4プログラム)
9/18(土)13:00~ 料金:¥1,000(各回入替制・全席自由)
特別企画上映(3プログラム)
9/19(日)13:00~ 料金:¥1,500(各回入替制・全席自由)
コンペティション部門(ノミネート作品上映ほか)
9/20(月・祝)12:00~ 料金:¥1,500(1日通し・全席自由)
(問)NPO法人シネマパンチ TEL/03(3412)2970
水戸市民舞踊学校企画『ひとりてダンス2』
9/26(日)14:00開演 入場無料

現代美術センター

「カフェ・イン・水戸 2004」
- Communicable Action for Everybody 2004 -
8/8(日)~10/3(日)9:30~18:00(入場は17:30まで)
休館日:月曜日ただし9月20日(月・祝)は開館、翌9月21日(火)は休館。
入場料:一般¥800 前売・団体(20名以上)¥600
中学生以下・65歳以上・各種障害者手帳をお持ちの方は無料

茨城の主な8・9月の演奏会

佐川文庫 TEL/029(309)5020
佐川文庫サロンコンサート~若きピアニストたち~ 後藤正孝ピアノ・リサイタル
9/4(土)18:00開演
常陽藝文センター TEL/029(231)6611
高木東六・百歳記念コンサート 9/8(水)14:30開演
(問)平野由江 TEL/045(641)3066
茨城県民文化センター TEL/029(241)1166
新垣 勉 おしゃべりコンサート 8/28(土)14:00開演
吉田 正 記念オーケストラ 吉田メロディーの夕べ 9/5(日)14:30開演
ひたちなか市文化会館 TEL/029(275)1122
ひたちなか市芸術祭 ひたちなか市民オーケストラ第23回定期演奏会
9/26(日)14:00開演
日立シビックセンター TEL/0294(24)7711
天球コンサート「星空のラブソング~星のささやき 天のうたごえ」
9/10(金)18:30開演
こどものためのプロムナード・コンサート 宮本文昭 オーボエのひびき
9/29(水)18:30開演
大宮町文化センター・ロゼホール TEL/0295(53)7200
寺井尚子クインテットwith小林 桂~スーパーLIVE~ 9/11(土)18:30開演
ギター文化館 TEL/0299(46)2457
ホセ・マヌエル・カーノ リサイタル 8/29(日)15:00開演
大萩康司 ギター・リサイタル 9/25(土)15:00開演
スペースの都合で水戸市及び周辺に限らせていただきました。ご了承下さい。

水戸芸術館音楽紙【ヴィーヴォ】 2004年9月発行 第101号
編集・発行/水戸芸術館音楽部門 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8
TEL:029-227-8118 FAX:029-227-8130
e-mail [ankmr@arttowermito.or.jp] URL [http://www.arttowermito.or.jp/]
編集/水戸芸術館音楽部門(五十音順):小林聡子 関根哲也 中崎美智代 中村 晃
馬場千恵 矢澤孝樹(編集長)
DTP / office west
印刷所 / 株式会社あけぼの印刷社

次号は...あなたの音楽胃袋に挑戦!
秋のコンサートでんご盛り状態!